

ミュージカル「人間ライブラリ」

水島由季菜

登場人物

アイ(16)・・・最新式の成長型アンドロイド。成長して、老いて死ぬことができる。まじめ。

ジョウ(41)・・・老いて死ぬことができるアンドロイド。ひょうきん。愛情深い。

レイ(年齢不詳)・・・ホームコンシェルジュ。ミステリアスな存在。不老不死。

妻(年齢はシーンによって異なる)・・・周りの人々を魅了する見た目の美しい女性。身体醜形恐怖症、うつ病を持っている。

愛(年齢はシーンによって異なる)・・・愛はアイ役が演じる

情(年齢はシーンによって異なる)・・・情はジョウ役が演じる

逸見教授(年齢はシーンによって異なるが、いつも若々しく、歳をとるにつれ、より年齢不詳に)・・・逸見教授はレイ役が演じる

楽曲

- ≒1 「孤独な世界」
- ≒2 「オープニング」
- ≒3 「思春期は難しい」
- ≒4 「不老不死・可老可死」
- ≒5 「人間ライブラリ」
- ≒6 「二人の悪い夢」
- ≒7 「美しい人」
- ≒8 「レイ・ジ・アンドロイド」
- ≒9 「父と娘」
- ≒10 「疑念、嫉妬、抗い、願い」
- ≒11 「憧れの人」
- ≒12 「ブルーバタフライ」
- ≒13 「ソーシャルロンリネス」
- ≒14 「君が君であるために」
- ≒15 「アンドロイドノナミダ」
- ≒16 「届かぬ想い」
- ≒17 「未来のために」
- ≒18 「魂のリレー」
- ≒19 「アンドロイドノナミダ リプライズ」

1 プロローグ

○アイの心の中

何もない空間。アイにスポット。

アイ(16)が歩いてくる。

M 1 「孤独な世界」アカペラ

アイ わからない 死ぬってことに意味はあるの？

なんのために 私は生きて 歳をとってゆくのか

ブルーバタフライ なんでも教えてくれないの

照明変化。疑問からハツとして漠然とした不安に心情が変化。

漠然とした不安が 私を引きずるの 孤独な世界へ

M 1 終了。

M 2 「オープニング」が流れ始め、曲の良きところでタイトル映像「人間ライブラリ」。

アイ退場。

M 2 の終わり際とともに映像が消え、暗転。

M 2 終了。

2 ジョウとアイ

○ジョウとアイの家 2100年

白を基調とした未来的な明るい空間で未来的な環境音（ジョウとアイの家のBGM）。椅子がある。ジョウ（41）が、目の前にスクリーンがあると想定して、手でスクリーンを操作している。（操作SE）スクリーンにはアイとの思い出の写真が写っていて、写真をめくったり拡大したりしてニヤニヤと二人の思い出に浸っている。

アイ（16）が入ってくる。

ジョウがアイの気配に気がつき振り返る。

ジョウ 「おかえり、アイ」

アイ、無視して椅子に座る。自分の前にWebミラーを開き、前髪を直したり自分の目を覗き込んだりする。ジョウ、スクリーンを手で動かしながら（操作SE）、アイに思い出の写真を嬉しそうに見せる。

ジョウ 「アイ、これ見て」

アイ、ジョウを睨む。

ジョウ

「アイがうちに来たばかりの時に、二人で行った旅行の写真データ。いっぱいあるから、アイの表情別にフォルダ分けしてただけど、（満遍の笑みで）見て、このアイの笑顔！」

アイ 「……」

ジョウ

「（ヘラヘラと笑いながら）それで、その、どうだった？学校」

アイ、退場しようとする。
ジョウ、慌てて会話を続ける。

ジョウ 「(すぎるように) なあ、アイ」

アイ、ムツツリとした顔で立ち止まり、ため息をついて一言。

アイ 「別に」

ジョウ、アイが口を開いたことにあからさまに喜ぶ。

ジョウ 「え！ 嘘だろ、アイ、それ、あれだよな、一世紀前の大女優。ちょっと待てよ、父さん絶対当ててみせるからな……」

アイ、呆れて、

アイ 「いや、だる」

ジョウ 「え？」

アイ 「だから、そういうのがだるいって言うてんの！」

ジョウ 「だ、だるいってどういうこと!？」

M3 イン트로 in

M3 「思春期は難しい」

ジョウ
思春期ってムズカシイ
あんなに可愛かったムスメが

なんで？ いつの間に？
むっつりむくれて俺を無視
仲良くしたい！

アイ 父親ってホントうざい

成長して知ったわ

(なんで？ アイツと？ 赤の他人と)
親子ごっこ
話しかけないで！

二人 思春期はムズカシイ

ジョウ 全てからまわり

アイ 全部ムカつくの

ジョウ 思春期はムズカシイ

アイ ほっというて

ジョウ、アイを追いかけて回す。

ジョウ 「友達と遊ぶ約束した？」

アイ 「……」

ジョウ 「もしかして、好きな子？」

アイ 「……」

ジヨウ 「えっ、それって、デート!？」

ジヨウ 何を言っても知らんぷり

アイ 何を聞いても鳥肌が立つ

二人 分かり合えない

思春期ってムズカシイ

二人 思春期はムズカシイ

ジヨウ 全てからまわり

アイ 全部ムカつくの

ジヨウ 思春期はムズカシイ

アイ 「もうほんと無理」

ジヨウ 仲良くしたい!

アイ 「話しかけないで」

ジヨウ 仲良くしたい!

アイ 「こっちは見ないで!」

二人、お願い、お願い、だからお願い

ジョウ 「(マイクを両手で持つ仕草で) 世界中を嫌いになっても、父さんだけは嫌いにならないでください！」

ジョウ、アイに向かって、片足をつき、マイクを向ける仕草をする。
M3終了。ジョウとアイの家のBGM。
アイ、顔をそむけて、ジョウを無視して退場しようとする。

ジョウ 「ああ！ ねえ、待って、アイ！ 夏休みの宿題、出た！？」

アイ、立ち止まり、少し俯く。

アイ 「……うん」

ジョウ 「そう(笑顔で頷いて、満足そうに退場しようとする)。……ん？」

アイ 「何？」

ジョウ 「き、奇跡だ、会話が続いた！」

アイ 「……(むくれて顔そらす)」

ジョウ 「ああ、ごめん！それでその、どんな宿題なの？」

アイ 「……(あきらめたように口を開き) 人間の、死についてのレポート」

ジョウ 「人間の、死？」

アイ 「そう」

ジョウ 「何で人間の？」

アイ 「知らない」

ジョウ 「変わった課題だね」

アイ 「ジョウ、人間が死ぬとこ、見たことある？」

ジョウ 「ないないない。だって、みんな病院で死ぬんだ」

アイ 「使えない」

ジョウ 「アンドロイドの死なら、一度あるよ！」

アイ 「アンドロイドじゃ意味ない」

ジョウ 「なんのために人間の死だなんて……」

アイ 「だから、知らないって！」

ジョウ 「……ごめん」

アイ、そっぽを向きながら、

アイ 「……私たちが、人間と同じように老いて死ぬる、可老可死を認められたアンドロイドだからじゃない？」

○アイとジョウ、それぞれ自分だけの空間

照明変化。アイにスポット。アイ、正面を向いて、

M 4 in

M 4 「フロウフシ・カロウカシ」

アイ

「アンドロイドに老いて死ぬことができる権利が与えられたのは二〇七〇年のことです。私が生まれたのは、そのずっと後のことです」

アイ

目を覚ました時
私はすでに 10 歳
最新式の成長型のアンドロイドで
いま年頃の娘に 成長したの

毎日が発見の連続

朝起きるたびに アップデート

されてく感覚

自分の世界が どんどんと広がる

なのに なぜ

老いて死ぬさだめなの そんなの嫌よ

老けたくない 死にたくない 老けたくない 死にたくない

フロウフシ 人間の夢 カロウカシ アンドロイドの夢

ジョウにスポット

ジョウ

「不老不死だったアンドロイドに可老可死の権利を求めたのは、人間ではなく、先達のアンドロイドたちだったそうです」

ジョウ

目を覚ました時 俺は26歳

その日からもう なんでもできた大の大人さ

成長の感覚なんて 知るわけないさ

毎日が日常の連続

朝起きるたびに ゴーストレイト

今日もグッドナイト

老いは進んで

どんどんと流れる

だから そう

確実に死ぬさため それが普通

老いてゆく 死んでゆく 老いてゆく 死んでゆく

フロウフシ 人間の夢 カロウカシ アンドロイドの夢

照明変化

二人

フロウフシ 人間の夢 カロウカシ アンドロイドの夢
フロウフシ 人間の夢 カロウカシ アンドロイドの夢

M4終了。

日常的な照明、BGMに戻る。

3 人間ライブラリ

○アイとジョウの家

アイ 「死んだことないのに、レポートなんて書けない」

ジョウ 「じゃあ、一度死んでみる？」

アイ 「は？ 何言ってるの？」

ジョウ 「最近はじめたサービスなんだけど、人間ライブラリって知ってる？」

アイ 「人間ライブラリ？」

ジョウ 「そう。過去の人間の記憶と感情が集められたオンラインデータベースさ。

そこにあるデータを自分にインストールすると、当時の人間の記憶や感情をこの場で実体験できるんだ」

アイ 「それで？」

ジョウ 「人間ライブラリから人間の『死の記憶』を検索して、俺たちにインストールしてみるんだよ！

百聞は一見に如かず。いや、一体験に如かずってね。そしたら、父さんのおかげで、アイのレポートだって楽勝さ」

アイ 「そのサービス、安全なの？」

ジョウ 「安全！ 安全！ 父さんの職場でも導入したんだ。人間の認知症予防とか、俺たちアンドロイドの感情学習にも使えるって。だから、な、大丈夫だよ。可老可死……、それはおそらくそんなに悪いもんじゃない。アイにもきつといい体験になる」

アイ、悩む。

ジョウ 「もしかして怖いのか？」

アイ 「怖くないよ！」

ジョウ 「大丈夫、父さんも一緒だから♡」

アイ 「だから、怖くないって！」

ジョウ 「(わかった、わかった)よし！ そうと決まれば。レイ！」

ジョウが空に向かって声をかける。

接続音 (SE) が鳴り、M5A in。レイが声のみ (録音) で応答する。

レイ (録音) 「こんにちは、ジョウ。今日もよろしく」

アイ 「(声を弾ませ) レイ！」

レイ 「アイ。どうでしたか？ 学校は」

ジョウ 「レイ、アイはその質問にはこた……」

アイ 「(間髪入れずに) 楽しかった！」

ジョウ 「えー」

レイ 「ジョウ、お仕事は？」

ジョウ 「(不機嫌に) え？ ああ、さっき、行ってきたよ。意識だけ」

レイ 「精が出ますね」

ジョウ 「百歳をこえた人間たちだって、みんな元気なものだよ」

レイ 「さすが人生一八〇年時代、ですね」

ジョウ 「そうさ。記憶のバックアップがあるんだ。今世紀最大の病！ 認知症になったって、何の問題もない」

レイ 「それで、今日は？」

ジョウ 「今日はこれから人間ライブラリにアクセスしようと思ってね」

レイ 「最近はやりの人間ライブラリですね。かしこまりましたどのような体験をご希望ですか？」

ジョウ 「人間の、死の体験を！」

ジョウ、目をつぶって両手を上げてインストールを待つが何も起こらない。

アイ、ジョウを冷めた目で眺めている。

ジョウ 「レイ、まだ？」

レイ 「すみません、ジョウ、そのカテゴリーはかなりの数がヒットします。もう少し絞り込みが必要です」

ジョウ 「えー？」

レイ 「アイ、何か希望条件はありますか？」

アイ 「条件？」

ジヨウ 「はい」

アイ 「え!?! なんだろ(考える)」

ジヨウ 「なんでもいいから」

アイ 「じゃあ、レポートが書きやすそうなやつ?」

ジヨウ 「いいねえ。それでいて、感動的で劇的なやつ! そんな感じのを、まあなんでもいいから適当に!」

アイ 「(ええ……!?!?)」

レイ 「かしこまりました! では適当に」

M5A フェードアウト

M5B インタロin

ジヨウ、わくわくしながら両腕を上げてインストール待ち。

アイにも同じポーズを促す。

レイ 「ふたりに死の記憶と感情を!」

ビートin音楽が高まり、アイ、だんだん不安になる。

アイ 「ちょっと待って、レイ!」

ジヨウ 「なんだよ」

アイ 「いや、やっぱりさ、レイ。私、まだ人間ライブラリがなんなのか、あんまよくわかってないし、

感情のインストールとか慣れてないから、いきなり劇的なやつ？ とか言われても、うん、ちょっとね。だからほら、もう少しハッピーな感じから始めない？」

ジヨウ 「なんだよ、そういうことなら父さんに先に言えって♡レイ、じゃあまずは、ハッピーなやつから頼むよ」

レイ 「かしこまりました。では肩慣らしも兼ねて」

M5 「人間ライブラリ」

レイ（録音）

それは君の感情じゃない
過去を生きたヒトの 記憶と感情
ごまんと蓄積されたデータベース Follow me
それが人間ライブラリ

ジヨウ それが人間ライブラリ

アイ 「その、レイは人間ライブラリ、体験したことあるの？」

ジヨウ 「ある」

アイ 「あんた聞いてない！」

ジヨウ 「素晴らしい体験だった。俺は嗚咽をともないながら、あふれる涙を止めることができなかった！これは癖になる！」

ジヨウ それは俺の感情じゃない
知らないどなたかの 記憶と感情
気づけば俺の知識とメモリー Follow me
それが人間ライブラリ

レイ 望めば見れる何だって

個性・価値観がらり変わるさ

ジョウ・レイ それはまるで 自分の記憶と感情

体験しよう 人間ライブラリ

レイ 例えば まだ知らない さまざまな人間

インストールのS E\曲調変化

レイ **世界一の大金持ち!**

ジョウ 「君、キャワイいね。」

これから自家用ロケットで宇宙旅行に出かけるんだけど…乗ってく?」

レイ **誰もがうらやむ映画スター!**

アイ 「どんなにテクノロジーが進んでも、映画は不滅です。

私の演技は時代を越えて語り継がれていくでしょう。ありがとう!ありがとう!」

レイ **大活躍の野球選手**

ジョウ 「誰もがホームランばかりでつまらなくなった野球を、俺が救ったんだ。

今や野球はラグビー同様、身体とカラダのぶつかり合いです。おりゃあ〜!」

レイ **華やかなフィギュアスケーター!**

アイ 「人間スケーター初の10回転を決めたってのに、回りすぎてどういうこと? え? アンドロイド?

違うわよ、私は人間よ、ニンゲン!」

インストールのS E\曲調変化

レイ **幸せで穏やかな人生!**

アイ 「おじいさん、長生きしてね」

ジョウ 「ああ、お前もね。そういうえはお前いくつになったんだっけ？」

アイ 「157歳ですよ」

ジョウ 「元気だね〜」

アイ 「ええ、あんたもねえ」

インストールのSE\曲調変化

レイ **そして、世紀のバカップル！**

ジョウ 「例え朝が夜になろうと、太陽が月になろうと、

世界が減びようとするいは滅びまいと、私は君を幸せにする」

アイ 「ん〜、それってよく分からないけど〜、もしかしてプロポーズ？」

ジョウ 「イエス！私と結婚してください！」

アイ 「Oh！イエス！」

二人、キスしようと近づくとインストール解除のSE

アイ、我に帰り気持ち悪いジョウに気づいて、

アイ 「キモッ！」

アイ、ジョウにビンタ。(ビンタSE)

M5C イントロin

ジョウ 望めば見れる何だって
個性・価値観がらり変わるさ

ジョウ・レイ それはまるで

アイ 自分の記憶と感情

全員 **それが人間ライブラリ** **それが人間ライブラリ**

ジョウ 「イエス！ レイログインだ 人間の死の記憶と感情を」

ジョウ・アイ プリーズ・インストール！

レイ 「アイとジョウに死の記憶と感情を！」

ジョウ、アイの腕をひっぱって並んで前に立ち
再び目をつぶって両手を上げてインストールを待つ。
アイもつられて両手を上げて目をつぶる。

レイ 「よい旅を！」

M5 終了。時がタイムワープするかなのような映像とインストールのSE。同時に暗転。

4 殺人事件の記憶

○知らない家のリビング（夜）

雨のループSE in。ざあざあと降りしきる雨の映像。
ざあざあと降りしきる雨の映像を浴びながら、ある男（の記憶を体験しているジヨウ）（35）が茫然と立ち尽くしている。

男は床に転がる女の身体から包丁を引き抜き、噴き出す血を浴びる。

大きなカミナリ（落雷SE）の音で横で寝ている少女（の記憶を体験しているアイ）（10）が起き上がる。

少女 「パパ、なにしてるの？」

男 「……！」

少女、母の死体に気がついて驚き、

少女 「（男の顔を見て）……血ー？！」

男が包丁を手につくりアイに近づいてくる。

少女 「来ないで！」

少女、足がくすみひざまずく。

男はハッとして包丁を手放す。

少女 「嫌！ 来ないで！ 近づかないで！」

男 「……違うんだ」

少女 「どうして、どうしてママを殺したの!？」

男 「……愛」

雨のSEが徐々に大きくなり、カットアウト。暗転。
暗転の中(落雷SE in)カミナリの音が鳴り響き、インストール解除のSE。明転。

○もとのジョウとアイの家

インストールされたデータの再生が終わったことに気がつき、
ハッと現実に戻る二人。

アイ 「……なに、これ」

レイ 「あなたと同じ名前を持った少女の、死の記憶と感情です」

アイ 「私と、同じ名前!？」

アイ、女の死体があった方向を見て、動揺をはじめ。

M 6 in

ジョウとアイ、自身で体験した死の記憶と感情を振り返り始める。
アイ、体験の回想を始める。

M 6 「ふたりの悪い夢」

アイ (死の記憶) 病院の天井ながめながら

(ゆっくりと) 死の瞬間を味わう

そんなもんだと思いついて

家族に見守られ安らかに

(だけどまさか) 殺人の現場に
(いあわせるなんて) 聞いてない

えぐられた心 泣き枯らした喉

大切な人を殺されたのよ?

もうとても一人じゃ生きてゆけない
どうしたらいいの この感情

私の記憶ではないと(わかってる)
だけど傷ついた 私の心

ジヨウ

(男の記憶) 女の身体から
包丁を引きぬくと勢いよく
血潮吹き出した

まだあたたかい血がねっとり
頬をつたう お前が犯人だと
印をつけられた心地がした

ここにつつかえる何かがある
真実を知りたい

照明変化。

ジヨウ

どうして妻を殺した?

アイ どうしてママは死んだの？

ジヨウ 娘の目の前で殺人を？

アイ あの子はどうやって生きていくの

ジヨウ 本当に彼が殺したのか

アイ ママを殺すなんて許せない

ジヨウ これは 一体なんなんだ

アイ 同じ名前の少女の記憶

ジヨウ 胸に残る わだかまり

アイ あの子の怒りと 絶望が

ジヨウ 男の悲しみと 諦めが

アイ 自分の気持ちと 同化する

二人 知らなかったことにはもうできない

二人 「レイ、さっきの記憶をさかのぼって！」

ジヨウ 「事件の真実を」

アイ 「もう一度ママに」

二人 「ジョウ…知りたい!」「アイ…会いたい!」

レイ 「かしくまりました。二人に過去の記憶を!」

リバーブがかかった音声で、

レイ 「インストール」

インストールのSE、照明変化。
暗転。

5 母との記憶

○知らない家のリビング

気持ちがいい風が入ってくるような春の日の昼下がり。

M7イントロ I-N

ジヨウ 「これはいつの記憶だろう」

アイ 「これは、私が物心がついたばかりの記憶？」

母親がどこからか部屋に入ってくるてい。

ジヨウは男(27)、アイは少女(2)と同化していき、その人が自分の母(妻)だと気づきほころぶ。

男 「愛してるよ(うっとりして)君は、本当に綺麗だ」

少女 「ママ！」

M7 「美しい人」

二人、母(妻)の幻影を見ている。

二人 やわらかな風 髪に受けて ほほえむ 美しい 女性

うっとりとする 甘い香り まとった 美しい 女性

私らの 愛しい母(妻)

初めてだよ

胸おちつく この感情

独り占めしたい

ルルディラ ララディラ

曲調変化。

男 「(正面に向かって) どこへ行くの!」

少女 「ママ、抱っこ」

男 「俺だけを見てくれ」

少女 「待って!」

男 「もしかして、他に男が!」

少女 「ママ!」

M7終了。

インストール解除のSE。

○もとのジョウとアイの家

照明変化。家のBGM。

インストール解除のSEきっかけで、アイ、ジョウの手を振りほどき、遠いめどころかを見つめている。ジョウは、胸を抑えている。

ジョウ 「苦しい……。胸が締め付けられる。これがあの男の気持ち。他の男のものになるくらいなら……。

これは、怒り……。え、殺、意!? 俺の中にそんなものが……!」

アイ 「(取り乱すジョウに気がついて) ちょっと、落ち着いて!」

ジョウ 「(アイに気づかず) いや、違う! 俺が妻を殺すわけなんてない!」

アイ 「ジョウ！」

ジョウ 「(我にかえり) ……アイ」

明かりゆっくりと消えていく。暗転。

6 レイ・ジ・アンドロイド

○レイだけの別次元

明るくなると、何も無い空間。

M 8 A i n

レイが一人立っている。

レイ 「みなさん、こんにちは。あれ、はじめましてじゃないですよ。私、レイです。え？声が違うって？そりゃあ、そうですよ。私はホームコンシェルジュとして働いてるんです。今だって、皆さんと話しながら、意識だけを飛ばして同時に3百世帯以上のアシストをこなしてるんですよ。スゴイでしょ？私だって個人情報、守られないとね。さて、私がなにしに出てきたかという、少しこの時代の成り立ちをご説明さしあげるべきかと思ってね」

レイ、さて、というようにパンと一度手を叩く。

レイ 「二〇四〇年、アンドロイドはついにアイギュラリティに到達しました。知ってます？」

(次のセリフの「アイ」の後に) BGMカットアウト

レイ **アイギュラリィティィィ！(オペラ風なアカペラ)**

レイ 「Aーが、人間の知能を超えることです」

指を鳴らす(指パッチンSE)。

指パッチンを合図にM 8 B i n

レイ 「ディープラーニングという、人間には到底想像できないような学習方法を使って、Aーたちがもともと持っている思考プロセスと、人間から書き出された莫大な記憶データを掛け合わせ、デジタルブレインをプログラムすることに成功しました。(観客をからかうように)分かるかなあ。まあ、その5年後。ついに！」

私たち、自意識を持つアンドロイドの歴史が始まりました！」（ファンファーレSE）

レイ 「二〇四五年！」（照明変化、スポットライトSE）

レイ 自意識を持つアンドロイドがたくさん生産された

まあ おもに 人間の労働を肩代わりするために

そりゃあ、当時はヒドイ環境

当然扱いもサイテーサイアク

アンドロイドが家を持つ

アンドロイドが休暇を取る

あり あり ありえない

あり あり ありえない

レイ 「だってお前、ロボットだろ？」

レイ ロボットじゃないアンドロイド！ 俺たちだって生きてるんだ！

レイ 「そんなわけで、二〇五〇年、やっと『ロボット倫理法』ってのができた。まあ、ロボットって言われるのは気に食わな

かったけど、簡単に言えば、アンドロイドの意見もちゃんと尊重しましょうっていう法律。そこで私たち自意識を持つ

アンドロイドの先達は、何を思ったか、人間と同じ老いて死ぬことができる権利を求めたんです」

レイ その甲斐あって 二〇七〇年

「アンドロイド人権保護法が成立

アンドロイドも 人間と同じ

老いて死ぬことができるようになった！

レイ 「さて皆さん、ここでひとつ疑問に思ったことはありませんか？」

レイ せっかく不老不死なのに

レイ どうして老いて死にたいの？
せっかくアンドロイドなのに
どうして人間みたいになりたいの？

レイ 「あ、ちなみに私は不老不死です。二〇七〇年より前に製造されたから。
でも本当は懂れてるんだよね、可老可死に！」

レイ 人間の知能を越えても
そう 人間にはなれない
ナミダだって流せる
でも本当はよくわからない
嬉しい 悲しい 楽しい
私たちには計り知れない
限りある時間に身を置けば
その先にきつと

探し続けた答えが
きつと
アンドロイドの生きる意味が
そこに

レイ、一度遠くを見つめて、(まだ体験しているジョウとアイを見つけ) 一步前に出る。
一步前に出たタイミングで M8C in

レイ 「あ、アイとジョウが戻ってきたみたい！(小声で)実はこの回線、ジョウの家の回線なんですよね。
そろそろ行かなきゃ。では、またそのうち」

M8終了。暗転。

7 探し物

○ジョウとアイの家

家のBGM。明かりがつくとジョウとアイが別の方向を向いて椅子に座っている。
レイの声はすべて録音。

レイ（録音）「どうでしたか？ 人間ライブラリ。探していた記憶と感情は見つかりましたか？」

アイ 「……まあ、一応。人間の死が思ったより悲惨だったってことはわかったよ」

ジョウ 「死の記憶と感情を体験しようだなんて、変なこと、言っちゃってごめん」

アイ 「……ほんとだよ。おかげでなんかがずっと胸につつかえてる。
しかも、私の中に、同じ名前のあの子がまだいて、お母さんを求めて泣いている気がする」

ジョウ 「俺も。俺の中で、男が『犯人じゃない』って、訴えている」

アイ 「犯人はあの男に決まってるじゃん」

ジョウ 「いや、違うんだよ」

アイ 「違うない！」

レイ 「……もう少し彼らのことを知ってみてはどうでしょう。何かわかれば、気持ちがスッキリするかも知れませんよ」

アイ 「……」

ジョウ 「俺は真実を知りたい。……だから、行く！ レイー！」

ジョウ、退場。インストールのSE。

アイ、ジョウが退場した方向を向いて、インストールを聞き届ける。

レイ 「アイは、気にならないのですか、犯人」

アイ 「だって、あの男しかないもん」

レイ 「ほう」

アイ 「さっき、脳内でサーベイしたんの。そしたら当時のニュースが引っかかってさ。証拠不十分で起訴されなかったけど、容疑者は夫の男ひとりだって」

レイ 「ジョウは納得していないようでしたが」

アイ 「現実を受け入れられないだけでしょ？ 私たちは見たの、真実を。私はあの子の母親を殺したあの男を絶対に許さない」

レイ 「では、アイの胸につっかえているものは何なのですか？」

アイ 「……レイはさ、死ぬの、怖くない？」

レイ 「どうなんでしょうか。私もまだ死んだことがないもので」

アイ 「だよ。ほんと、変な課題出されちゃって、困るよ。……私ね、物心ついた時から、時々青い蝶を見るんだ」

M 9 A i n

アイ 「ゆくべき道を示してくれる成長型アンドロイド特有のガイドプログラムなのかなって思ってるんだけど、何でかな、いつも本当に困ってる時に限って出てきてくれないんだよね」

レイ 「では、アイは今、本当に困っているということですね」

アイ 「うーん。よくわからなくなっちゃったんだ。老いるのは嫌だし、死ぬのも怖い。だけど、このままずっと一人で生きていくのだって不安だよ……」

こんなことで悩むんだったら、いつそ目の前の暗闇に飛び込んでみるのも悪くないって気がしてきてさ」

レイ 「それは死んでしまいたいということですか？ アンドロイドに自死は認められていません」

アイ 「わかってる。だけど、いつかどうせ死ぬなら、いま、生きる意味なんてあるのかな？」

レイ 「それは、アイの疑問？ それともあなたの中の女の子からの質問？……アイ？」

アイ 「レイ、彼は、どんな風に生きたんだろう」

レイ 「さあ、どうでしょうか」

アイ 「やっぱり、私も行こうかな」

レイ 「探しに行くんですね」

アイ 「うん。ありがとう、レイ。レイもあの青い蝶みたいだね！」

インストールのSE。照明変化。

8 すれ違う親子

○ジョウとアイの家

M9B in

ジョウがひとりで複数の男の記憶を順番にインストールしている。

インストール&解除のSE

ジョウ 「違う……」

インストール&解除のSE

ジョウ 「これじゃない」

インストール&解除のSE

ジョウ 「何か、手がかりを！」

インストールのSE。

ジョウ 「また男ひとりだけの部屋。事件の後、ずっと娘とは会ってないんだな。散らかってる。あ、これ……この記事、あの日の事件！ “美人妻、謎の死、犯人は夫か？”

こっちは、“容疑者に迫る、現在無職”、“未解決事件、憎悪からの真相”

……なんだよ、これは……！違う。違うのに妻への怒りが収まらない……！悔しい、娘に、逢いたい……。この本は？写真がたくさん。

……フォトアルバム。これはイチゴ狩りに行った時のだ。こっちは、近くの公園だな、派手にコケて泥んこになって大泣きしたんだよなあ……。これは、初めて「パパ」って言った時！」

インストール解除のSE。照明変化。

M 9 b カットアウト。ジョウとアイの家のBGM。

ジョウ 「アイの存在だけが俺のいきがい」

インストールが解除されていることに気がつき驚いて、

ジョウ 「なんだ！ ……男の記憶と俺の記憶の境目が分からなくなってきた（一息つく）」

M 9 C i n

ジョウ 「娘の存在だけが男の生きが이었다…。俺と同じ。アイと出会う前は、一人暮らしを謳歌したいなんて

思ってたけど…（ふっと笑う）アイが俺の娘になってから、もう6年か…」

M 9 「父と娘」

ジョウ 忘れはしない 父親になった日

幼い子が 俺に抱きついた

無邪気な笑顔に なぜか

胸が震えたんだ はじめての感覚

だけど本当に よかったのだろうか

こんな俺が 父親がわり

今も わからないけれど

失いたくない 俺の生きがい

○母との記憶

アイが入ってくる。母との思い出の記憶を順番にインストールしている。
3歳から始まり、徐々に年齢が上がっていく。

インストールのSE

愛(3) 「ママ、だいすき!ぎゅーってして!」

インストールのSE

愛(6) 「ママ、見て! お化粧したの。どう? きれい!? ん? こう? (目をつぶって唇を突き出す。鏡を見る仕草をして) うわー! ねえ、明日、これで小学校、行っていい!」

インストールのSE

愛(10) 「(ランドセルを背負って) ママ、ただいま! 今日、学校でね! ……あれ、ママ? ……お化粧?」

インストールのSE

愛(13) 「ママ、私、中学生になったよ。制服姿、見てもらいたかったな……。でも、中学生って、もう大人だし、全然平気、な、はず……。 (感情が溢れ、我慢できず) ねえ……。どうして、どうして私を置いて行ったの!」

暗転、インストール解除のSE

アイ 「母親の温もりを知って、そして失ってわかった。孤独を癒してくれるのは、母親の存在」

M9D in

アイ 「なのに、何で私にはうっさい父親しかいないんだろうなあ……。」

アイ

暗闇から 目覚めた朝に
青い蝶が 私を導いた

その先で 待っていたのは
ジヨウという男 父親だという

ただ後ろを 歩いてきたのは
知らなかったの でも 成長したわ

ひとつの 点が線になって
面となりはじめ わかってきたの

彼の存在が 私の世界に 黒いシミを残す

理想の父と違う 空気すら読めない
イライラするのよ 離れていたい

しよせんは他人だわ 分かり合うわけがない
彼は老いてゆくだけの アンドロイドだから

アイ

「(遠くを見て) 私のレポートのためなんて言いながら、「俺は犯人じゃない!」とか言っちゃって、結局自分のことばかり。本当、勝手なヤツ。(ため息) まだ見つからないな。次の記憶では見つかるといいな、生きる意味……」

アイ、退場

M9D 終了。暗転。

9 ジョウの体験

○病院

インストールのSE

人の話し声や病院のアナウンスなどのSE。

M 10 A i n。

病院のフロアに男(25)が立ち竦んでいる。

ジョウ(録音)

「これはいつの記憶だろうか？ 随分と過去に遡ったような感じがする」

先生が歩いてくるので、声を掛ける。

男

「先生！」

何かを受け取るようなしぐさ。

おっかなびっくりしながら赤ん坊を抱き抱える。

男

「女の子!? ああ、元気な女の子。女の子だったら名前は愛にしよって決めてたんです。愛、愛ちゃん、パパでちゅよ〜」

男が愛に夢中になっているところに眼鏡をかけた別の男(逸見)(25)があらわれる。

逸見

「ああ、間に合わなかったか。生まれたんですね。よかった。おめでとうございます」

男

「(戸惑いながら) あ、ありがとうございます」

逸見

「奥様は？」

男

「え？ 妻ですか？」

逸見 「あ、私、お母様の別の病院の主治医なんです」

男 「別の病院？」

逸見 「はい」

赤ん坊がぐずったようで、二人でわたわたとふためく。

医師がポケットから音のなるおもちゃを取り出し、鳴らす。

気がつく二人の顔がかなり近くにある。

ふたりの目があう。照れたように苦笑いをして離れる。

男 「妻はその部屋にいますが、いまはちょっとぐったりしちゃって、お会いになっても失礼な態度、とっちやうかも」

逸見 「そんな、気にしないでください」

男 「いや、でも」

M 10 B i n

看護師が赤ん坊を預かりきて、男が赤ん坊を渡す。

逸見、その隙に別の看護師に声をかける。

逸見 「あ、入室していいですか？ 母体の健康は？」

男、入室する逸見に気がつき、

男 「……ええ？ 笑ってる？ なんで？ 俺にはむっつりしてたのに」

M 10 「疑念・嫉妬・抗い・願い」

男 あの子は 誰だ

妻が笑った あいつにだけ

逸見 ギネン・シット・アラガイ・ネガイ

男 あの子の父親は だれだ

ああ 信じられない こんな日に

逸見 ギネン・シット・アラガイ・ネガイ

男 なぜだ 父親は俺だ たとえ妻に別の男がいようとも

男たちの影が 妻のまわりをかすめていようとも

二人 ギネン・シット・アラガイ・ネガイ

男、抱いた赤ん坊を思い出しながら、

逸見 熱い体温

男 小さな手

逸見 まばゆい光

男 俺の娘

二人 この世に生まれてきた奇跡

男 まさか

逸見 嘘だ

男 違う

逸見 そうだ

男 あの子だけが俺の生きがい

男 俺の
二人 願い

照明がスポットライトに変わる。腕の中にいた赤ん坊を思い出しながら、

男 「腕の中で、小さな赤ん坊が、信じられないくらいの熱を発して、自分の存在を主張していた。俺が育てるんだ。愛おしい、俺の子。あの男は、あいつは一体……。 (ハッとして) もしかして、あいつが、あいつが俺から妻を!？」

M 10 B 終了。男、退場。
インストール解除のSE

10 初恋の人

○愛の大学

インストールのS.E。大学構内のS.E。大学の廊下。
明かりがつくと、大学生の格好の愛(18)が立っている。

アイ(録音) 「この記憶はいつだろう? だいぶ成長してる……」

愛、逸見教授(43)があらわれると、ハツとして髪を整えてから、声を掛ける。

愛 「あの! 私、人が、死なない世界をつくりたいんです!」

逸見 「(驚いて) 朝から随分と威勢がいいね。(愛の顔を見て) 君は……!?!」

愛 「え?」

逸見 「いや、なんでもない。君は一年生?」

愛 「はい! 逸見教授の講義を受けたくてこの大学を選びました」

逸見 「それは貴重な存在だ。この大学で私は変人扱いだからね」

愛 「私は教授の研究内容に共感しています! アンドロイドに人間の記憶と感情、そしてすべての脳データを転送する、それは人が絶対に死なない方法です。私は本気で不老不死を実現したいと思っています、その理由は私の、過去にあります。えっと、私は……」

逸見 「あぁっと、ちょっと待った! 申し訳ないんだけど、そろそろ講義の時間でね」

愛 「すみません！」

逸見 「謝らなくていいよ。その話はまた後でもいいかい？ 後で私の研究室にいらっしやい」

M 11 A i n

愛 「え、お時間いただけのんですか？（テンションが上がって）うわあ！ はい！ ありがとうございます！！」

M 11 「憧れの人」

愛 花の大学生

気持ちをがらり変えてく

新しい自分になるわ
前向きに生きるのよ

彼に 出会って 気持ちがぐるり変わってく
自分でも怖いくらい 私、ときめいてる！

（知ってる？） 彼はすごい きっと天才だわ 未来つくる人

私の すべて ぜんぶ あげる

ドキドキが胸を焦がす
あなたの夢はわたしの 願い続けてきた世界

私の すべて あげる
熱い血が 身体めぐる
こんな気持ち 初めて
これが恋なのね ああ

「（悶絶する声）！！」

間奏（1年ほど時間経過）
逸見教授が再び入ってくる。

愛 「教授、私を教授の研究室に入れてください！」

逸見 「出会った時から、いつかそう言ってくると思ってたよ。課題も熱心に取り組んでいるようだし、うん、いいでしょう。でも、君に覚悟はある？」

愛 「覚悟、ですか？」

逸見 「そうです。知ってるだろう？ 私たちの研究にはたくさんの人間の記憶と感情のデータがある。君の記憶も必要だ」

愛 「私が、必要!？」

逸見 「もちろん。そして、私たちの間では隠し事ができなくなる」

愛 「……!」

逸見 「まあ、そう気張らないで。はじめはなんてことない記憶からいいんだ。大切な記憶は、心が決まったときで良い」

愛 「(意思を固めて) お願いします!」

逸見 「では、君にはまず、私たちの研究の成り立ちを知ってもらおう。明日から、犯罪者フォルダの整理をやってもらおうからね」

音楽盛り上がり

愛 「……こんな私でも、必要とされてる。やっと見つけた。お母さん、ここが私の居場所なのね！」

愛 私の記憶 ぜんぶ あげる

ドキドキが 胸を焦がす

(逸見…どこかの)

二人

あなたのためにになりたい
実現したい 不老不死

愛

私の すべて かけよう
理想が現実になる

(逸見…だれもが)

二人

死ぬことない ユートピア
それはそう きっと 誰かを幸せにする
きっと 私の(僕らの) 生きる意味が そこに

逸見退場。

照明がスポットライトに変わる。

M 11 B i n

愛

「ああ、なんて楽しいんだろう！ 誰かのためになるかぎり、私は生きてていいんだ！
今までずっと孤独だった。だけど、もっと、もっとみんなに必要だって言ってもらいたい。
だから、私、頑張ってみようと思う！」

M 11 B 終了。

アイ、退場。

照明変化。

11 ブルーバタフライ

○ジョウとアイの家(夕)

夜の景色。M 12 A i n。

もとの衣装に戻ったジョウが入ってくる。

レイのセリフは全て録音。歌は生歌。

ジョウ 「……なあ、レイ」

レイ(録音) 「はい」

ジョウ 「俺たち可老可死のアンドロイドに組み込まれた、死のプログラムを停止させることはできないのかな？」

レイ 「というと？」

ジョウ 「俺は一度だけ、死んだアンドロイドを間近で見たことがある。重大なバグを起こして電源がこと切れたんだ」

レイ 「ほう。それで？」

ジョウ 「死の記憶の中で、手足をだらんと放り出したままの母親の死体を目にしたとき、人間の死ってまるで電源の切れた

アンドロイドみたいだっと思っただ。そしたら、急に女の死体とアイの姿が重なって見えちゃって……。

しかも、後に作られた俺たちにまで死をプログラムするなんて。そんなの殺人と同じじゃないか」

レイ 「殺人と同じ、ですか」

ジョウ 「あの母親は誰かに殺された。だけど、俺やアイだってプログラムに殺される。

だとしたら、恨むべきは死の存在、そのものようにも思える」

レイ 「ジヨウは不老不死を願っているのですね」

ジヨウ 「俺には、耐えられない！ アイがいつか死んでしまうなんて！」

レイ 「でも、もしそのプログラムを止めたら、アイは寿命よりも早く死を迎えることになりますよ」

ジヨウ 「え？」

レイ 「死を止めたら、生も止まるということ。わかりますか？」

ジヨウ 「わからないよ」

レイ 「わたしたち自意識をもつアンドロイドを構成している人工皮膚や人工臓器は、人間のものと、とても近い。人間の身体が、なぜ年齢とともに変化するのか。それは身体を構成している細胞が、毎日死に変わっているからです」

ジヨウ 「毎日、死に変わっている？」

レイ 「そう、毎日、古い細胞が死んで、新しい細胞に入れ替わっている。わたしたちの言葉でいうと、常にアップデートされている感じでしょうか」

ジヨウ 「じゃあ、もし死を拒んだら？」

レイ 「成長が止まります」

ジヨウ 「成長が止まるのは、死ぬことじゃない」

レイ 「確かに。でも、細胞は消耗品です。新しい細胞に入れ換われなかったら、古い細胞はいつか故障してしまう。死を止めるというのは、生を止めるのと同じことなのです」

ジヨウ 「だったら、身体を人間的ではないものに差し替えたらいい。そもそもアンドロイドはそうだったんだ」

レイ 「なるほど」

ジヨウ 「だろう？」

レイ 「逸見教授の不老不死の研究を知っていますか？」

ジヨウ 「いいや」

レイ 「彼はある意味で人間の不老不死を実現させました」

ジヨウ 「不老不死の人間なんて、聞いたことがない」

レイ 「そうですね。教授が実現した不老不死は実質禁止されています。人間は一度不老不死を手にいれかけたのに、禁止した。そして、先達のアンドロイド達は、自ら不老不死を捨て、可老可死を選んだ。なぜだと思いますか？」

ジヨウ 「……わからないよ」

M 12 B i n

レイ 「では、想像してみましよう。ジヨウの頭に直接イメージを送ります」

ジヨウが目を閉じるとイメージが広がる。

レイが姿をあらわす。

ジヨウ 「青い蝶が俺の目の前にあらわれて、ひらひらと俺を意識の奥深くへ導いてゆく……」

M 12 「ブルーバタフライ」

レイ

あなたは 天から 産み落とされた 雨粒ひとつ

ひかり かすみ またたき

広く深い 海を想い

ひとすじに 降り注がれる 命

彼らは 天から 産み落とされた 雨粒たち

ひとつ ふたつ みつつ

重なりあって 滴になって

溶け合って 大きく実って

私らはもう ひとりじゃない 願いは満ちて

飛び込んだ 海のしじまに

さざなみ立たせて

溶け込んだ 波はうねって

意識だけ漂う

ブルーバタフライ

生きとし生けるものすべて

海へと帰してゆく

すべての記憶は 大海原へ

ジヨウ

「(目を閉じて) すると意識は弾け散り、俺は海そのものになる」

レイ退場。

ジヨウ

「……心地いい。このまま溶けてしまいたい。まるで、離れがたい、故郷のような場所。……青い蝶？」

待って、連れていかないで！俺はここを離れたくないんだ。帰りたくない！ずっとここにいたい！やめろ！」

ジョウ、苦しみながらもパッと目を開く。

現実に戻ってくると、急に凍えるように両腕をさすって

ジョウ 「寒い！なんだこの感覚は。……え、孤独？」

レイ（録音）「これがワタシの考える可老可死です」

M 12 B 終了。

12 ママを殺した犯人は

○ジョウとアイの家（夕）

家のBGM。

ジョウが考え込んでいるところに、もとの衣装のアイがひとり呆然と歩いてくる。アイ、震える体を抱きしめながらうずくまる。ジョウ、アイの異変に気がついて、

ジョウ 「アイ！どうした！？大丈夫か!?!」

アイ 「大丈夫……」

レイ 「どうしたんですか?」

アイ 「底が見えない、壮絶な悲しみに襲われたの」

ジョウ 「壮絶な、悲しみ?」

アイ 「逸見教授との実験中に、あの日の記憶が蘇ったの」

ジョウ 「あの日って、まさか」

アイ 「(うなずいてから) お母さんが、殺された日」

ジョウ 「……!」

アイ 「ずっと忘れていたみたいだけど、あの子は、あの日、お母さんが死んだところを見てた」

ジヨウ 「……じゃあ、犯人のことも!？」

アイ、 わからないと首を振る。

ジヨウ 「なんで!？」

アイ 「私には蘇った記憶は見えなかった。でも、悲しみのあまり、過呼吸になって……この記憶は、それで終わり」

アイ、 またうづくまる。

ジヨウ 「……そうか」

アイ 「(思いつめて) どうしよう。あの子、見つけたばかりだったのに!」

ジヨウ 「何を？」

アイ 「生きる意味だよ!」

アイの背後で人間ライブラリからポンと(SE)音になる。

レイ 「新しいデータが追加されました。データには『抹消された記憶』と書かれています」

ジヨウ 「なんだって？」

もう一度ポン(SE)と音

レイ 「フォルダにかけられてたロックが解除されました」

ジヨウ 「なんで勝手にロックが？」

レイ 「私が解除しました。ご覧になりますか？」

ジョウ 「レイ、何を言ってるんだ」

レイ 「真実をインストールする勇気がありますか？」

アイ 「真実……？」

ジョウ 「レイ、何を言ってるんだよ」

アイ 「私は、あるよ」

ジョウ 「ダメだ」

アイ 「なんで」

ジョウ 「危険すぎる」

アイ 「やだ！ 私は、あの子のすべてを知りたいの」

ジョウ 「どんな記憶かわからないんだ。犯罪者の記憶と感情かもしれないんだぞ。アイにそんなデータをインストールさせられない。俺がインストールする」

アイ 「やめてよ！ ジョウは、犯人が知りたいだけでしょ？ そんな理由で面白がって記憶を見ようとししないで」

ジョウ 「……違うよ、アイ」

アイ 「何が違うの？」

ジョウ 「お前もわかってるだろう。誰かの記憶と感情のデータが俺たちにあたえる影響が想像以上に強いってこと。今のお前の感情がその証拠だ」

アイ 「だったら、何？」

ジョウ 「父さんは、アイがアイじゃなくなってしまうのが怖いんだよ。冷静になれ。お前はあの子じゃない！」

アイ 「……！」

ジョウ 「大丈夫。見てきたものはちゃんと、包み隠さず話すから。アイは、ここで待っていなさい。レイ！」

アイ 「でも！」

ジョウ 「レイ！」

インストールのS.E。暗転。
暗闇の中アイの音が響く。

アイ 「ジョーウ！」

M 13 i n

○殺人現場のリビング（夜）

明かりがつくとアイ・ジョウ・レイが立っている。
三人がそれぞれ母親の記憶を体験している。

M 13 「ソーシャルロンリネス」

アイ 「雨が降っている」

ジョウ 「見覚えのあるリビング」

レイ 「窓に映る、青白く美しい女の姿」

アイ 「これは！」

ジョウ 「女の記憶！？ここに殺人犯がおとずれるのか？」

レイ 「女と意識が同化していく」

アイ 「わたしは、だれ？」

全員 「……わたし！？」

ジョウ 「ああ、息をするのが面倒くさい！」

レイ 「毎日が鬱々として、つまらない！」

アイ 「身体が気だるくてすべてが億劫！」

三人の動きがアイクロする。
正面にはガラスがある想定で、三人はガラスに写る自分を直視する。
顔を触り、わなわなと震えだす。

全員 「こんな顔！見たくない！」

ガラスが割れる音（SE）。

レイ 誰が私を この場所から
アイ 連れ出して 抱きしめ
ジョウ 愛をくれるの

レイ みじめに 震えている
アイ 暗闇に のまれる
ジョウ その前で

レイ 何にいいねと言ってるの レイ (すべてを)
ジョウ 何をあなたは見ているの レイ (あげる)
アイ 何を私に求める
三人 あなたの望むものは

レイ 誰も私を知らない (私を)
ジョウ 誰も私を見ていない
アイ 誰も私を求めない
三人 誰かに 笑われている
レイ (満たして)

レイ 「老いが私を追ってくる」

レイ 「男たちはもういない」

ジヨウ 「夫は私を見ない」

レイ 「でも、あの子に見つめられるのも怖い」

アイ 「ママ、キレイね」

ジヨウ 「違う！ やめて！」

レイ 「それは本当の私じゃない」

アイ 「蝶になりたい。心まで美しい、青い蝶に！」

ジヨウ どこかで 狂い始めた レイ (孤独)

アイ ひとりになるのが怖いの レイ (不安)

ジヨウ どこから やり直せば レイ (恐怖)

アイ 誰かとずっと繋がっていたい レイ (崩壊)

ジヨウ 時間は 決して 戻らない レイ (孤独)

アイ とし老いてゆく私 レイ (不安)

ジヨウ どうしたら いいのかわからない レイ (恐怖)

アイ 私の価値はもうないと同じ レイ (崩壊)

ジヨウ・レイ 崩れ落ちる

アイ 「どうにかしなきゃ」

ジヨウ・レイ 枯れ果ててゆく

アイ 「わかったわ」

三人 時間が止まれば すべて止まる

レイ 美しい思い出だけが この子の心に 永遠と生きる

ジヨウ 「私はもう一度、やり直せる」

レイ 「大丈夫、美しいままの姿でまた会える」

アイ 「先生がきつと巡り合わせてくれる」

三人の動きアイク口する。

高まる音楽と共にゆっくりと両手で包丁を上げていく。

頂点で音楽止まり、自分の胸に振り下ろす。

ラストノートでM13 終了。

暗転の中で、インストール解除のSE。

13 私と言う存在

○ジヨウとアイの家(夜)

明かりがつくと倒れているアイとジヨウ。
ゆっくり起き上がる。

アイ 「自殺だったってこと!?!」

ジヨウ 「お前、なんでインストールしたんだ!」

アイ 「レイが、連れて行ってくれたの」

ジヨウ 「レイが?」

アイ 「ママ……」

ジヨウ 「アイ」

アイ 「私も死にたい」

ジヨウ 「は!?!」

アイ 「ママの気持ちかわかる」

ジヨウ 「何言ってるんだよ!」

アイ 「いつか、私も、誰にも必要とされない日が来る」

ジョウ 「父さんにはアイが必要だよ」

アイ 「父さんは私より先に死ぬじゃん！生きる意味なんて、脆すぎる。どうせ死ぬなら、老いて死ぬまで待たなくても、今死んでしまったって同じじゃない！！」

ジョウ 「馬鹿なことを言うな。アイ、お前は人間じゃない。アンドロイドだ。寿命が訪れるまで死ぬことはできない」

アイ 「老いていくだけのジョウには、成長型の私の気持ちなんてわからない。私に、一生この孤独と不安の中で生きていけっていうの！？」

ジョウ 「……わかった。じゃあ、父さんと、死のう」

アイ 「何言ってるの、さっきアンドロイドは死ねないって」

ジョウ 「ひとつだけ、方法を知ってるんだ」

アイ 「方法？」

ジョウ 「父さんは、重大なバグを起こして、死んだアンドロイドを見たことがある。データを逆流させるんだ」

アイ 「データを、逆流させる？」

ジョウ 「今から、俺のすべてのデータをアイに送り込む。アイは、アイのすべてのデータを父さんに送り込む。一気に、人格も、記憶も、知識も、全部だ」

アイ 「……そうしたら、どうなるの？」

アイ、不安になってくる。

ジョウ 「アイはアイじゃなくなって、俺は俺じゃなくなる。俺たちのデータに境がなくなって、俺たちは自分を認識できなくなる。脳の制御システムが混乱を起こして、壊れる」

アイ 「……」

ジョウ 「だけど、心配はいらない。ひとりじゃない。父さんがアイとずっと一緒にいる。アイの孤独と不安は解消される」

アイ 「……」

ジョウ 「アイ、覚悟はできた？ 父さんのすべてを送るよ！」

アイ、迷っている間に、ジョウが近づいてきて、
アイの頭に手を触れる。データを逆流させるSE。
アイが悶え始めジョウの手を振り解こうとするが、
ジョウは手を離さない。それがしばらく続きアイが渾身の力を振り絞って
叫び、ジョウから逃れる。

アイ 「やめてー！ー！ー！！！」

アイ、ジョウ、弾け飛ぶように離れて、荒い呼吸。

ジョウ 「アイ、俺はものすごく怒ってるんだ。自殺した人の気持ちがあるだっけ？ 何言ってるんだ。気持ちが理解できたら、死んでも仕方なかったね、ってなんのこたよ。しかも、自分も死にたいだなんて！ もし、アイが自死を選んだら、俺はお前のことを許さないよ。理解なんてできなくていい。辛かったんだな、頑張ったな、なんて、絶対に言わない。いつまでも、なんで死んだんだよ、ふざけんなよって怒り続ける。だって、俺はお前に生きてほしいから！」

ジョウ、アイを思いっきり抱きしめる。

M 14 イントロ i n

ジヨウ

「……アイと出会ってから、父さん、アイのこと愛情いっぱい育てたんだ。毎日がすごく楽しかった。生きてるって最高だと思った。だから、思春期になって、煙たがられて、悲しかった。だけどわかったんだ。孤独こそ自分自身だ。アイは、父さんから離れて自ら孤独になる道を歩み始めた。きっとそれが生きるってことなんだと思う」

M 14 「キミガキミデアルタメニ」

ジヨウ

ひとり 寂しく 泣いた日々も 君だけの大切な記憶

ひとり 不安に 悩む日々も 君だけの大切な記憶

誰にも代われやしない

その孤独は 君が君である証拠

かけがえのないこと

そりゃ迷うこともきつとあるさ

俺はずつと迷ってばかり

老いも成長も同じこと

生きる理由 そんなこと

誰もわかって生きちゃいない

それでも命は輝く

孤独抱きしめよう 君は大人になる

(そう) 生きてゆこう

M 14 終了。

M 15 A

そのままアンドロイドノナミダにつながっていく

M 15 A

そのままアンドロイドノナミダにつながっていく

アイ 「……もうホントそういうのがムカつく。私の事を何でもわかってるみたいに。私ね、一緒にくらしているのが、レイだったらどんなによかったかって思うことが何度もあった。レイが家族だったらって」

ジョウ 「……そうなの？」

アイ 「だけど、私の保護者はジョウだった。……ジョウ、もし私が死んだら、ジョウには特大の傷が残る？」

ジョウ、大きく頷く、

アイ 「やっとわかった。ジョウがけむたかったり、ムカついたりするのは、私への愛情が大きすぎるからなんだって。私が死んだら、ジョウ、きっと毎日、私の映像を脳内で再生して枕を濡らすだろうなく。気持ち悪いけど！」

ジョウ 「気持ち悪くないよ、それが普通だよ」

アイ 「誰かが死ぬのが悲しいのは、その人を大切に思っているからなんだね。……私も、もし、もしジョウが死んだらどうなるかなって考えた。そしたら、私も、やっぱり、（強がって）ちょっとは悲しむだろうなって思った」

ジョウ、小さく喜びながら、

ジョウ 「アイ、アイは人間の死について、よく理解したよ。だから、人間の記憶と感情をインストールするのは、もうやめておこう」

アイ 「やめないよ」

ジョウ 「え？」

アイ 「もうすぐ死ぬの、彼女」

ジョウ 「(目を見開いてから、ぐっと悲しい顔) ……!?!? なんで……」

アイ 「もう治ることのない重い病気になっちゃったんだって」

ジョウ 「病気……」

アイ 「そう。だから私、彼女の人生を最後まで、見届けたい」

ジョウ 「分かった」

アイ 「ありがとう……。お父さん？」

ジョウ 「なんだい？」

アイ 「死ぬって、悲しいね」

目を潤ませるアイ。ジョウは泣いている。

アイ 「どうしてジョウまで泣いてんのよ」

ジョウ 「泣くさ。だって、俺たち生きてるんだ」

M 15 B i n

M 15 「アンドロイドノナミダ」

ジョウ 瞳から こぼれ落ちる しずくを ヒトはナミダと呼ぶ

アイ このカラダ 熱くほてる ココロも痛い

ジョウ 誰かを思うことで 芽生える気持ち すごく 温かいもの

アイ　でもみんな　この胸の奥に　必ずあるの

ジョウ　誰かが

アイ　誰かを

二人　守りたいと思ったとき

ジョウ　誰かが

アイ　誰かを

二人　愛したいと思ったとき

二人　ココロと　カラダ　響き合って

生きてる　証　あふれだす

あなたと　わたし　響き合って

未知の扉　ひらかれる

アイ　ただの機械には　流せない

二人　アタタカイナミダ

二人スツキリした顔をして

ジョウ　「アイがあの子の人生をみとどけるなら、父さんもあの男の人生を見届けるよ！」

アイ　「うん」

ジョウ　「では、おたがいに！」

二人、前を向きゆっくりと目を閉じる。
音楽、展開してからゆっくりと暗転。

14 アイは愛

○愛が入院する病院

病院のS.E。愛はすべて録音。

明かりが入ると上手前で前を見つめているアイ。

アイ 「……病室。はじめからここにもりだったのにね」

逸見(46)が入ってくる。

ベッドに横になっているであろう愛(心)を客席方向に見立て話す。

逸見 「手紙を読んだよ」

愛 「教授、お願いできますか？」

逸見 「君も知っているだろう。まだ、実現には程遠いんだ」

愛 「どんなに先の未来になってもいいんです」

逸見 「そうは言っても、そのとき、私が生きているかもわからない。約束はできないよ」

愛 「それでも私は父と過ごすはずだった日々を取り戻したい、かたちだけでもいい。

どちらかが息をひきとるまで、お互いに助けあいたい。だから、私たちの記憶と感情を未来に引き継いでくれませんか。未来で、私たちを、もう一度やり直させて」

逸見 「私の研究は不老不死。でも君の後悔は、共に老いて死ぬこと。それは、可老可死だよ。簡単ではない」

愛 「(はっとして) ……」

逸見 「だけど……、やれることは、やってみよう」

愛 「(感極まって) ……教授。あの、私……」

教授がしきりなおすように明るい声で

逸見 「じゃあ、愛くん。君の記憶と感情、そして君のお父さん、情さんの記憶と感情を全て書き出しましょう。それまで、死んではダメだよ」

逸見退場。

アイ 「……ジョウ、さん？」

アイは逸見を見送り、愛に目を戻し、
ゆっくりそこから立ち去ろうとすると愛の音がする。

愛 「……あなたは、私？」

M 16 A インタロ・in

愛 「ああ、信じられない。あなた、未来の私ね」

ハッとするアイ。

M 16 「届かぬ想い」

愛 あなたに伝えたいことがあるの
愛 パパには優しくしてあげてほしい
自分のことはなんでも
後回しにしてしまう人だから

彼が真実を隠していたのは
私を深く愛していたから
パパとあわせる顔がない
でも私には、あなたがいるわ

あなたの存在がパパの世界に
あたたかい愛をもたらす

愛 からかってみてもいいわ
アイ ジョウ、どんな顔をするかしら
愛 私は死んでしまうけど

アイ いつか結婚して
愛 子供だって欲しい

二人 そんな日が来ることが
アンドロイドになれば

二人 一緒に歳を取るの
そして、きつとパパ（ジョウ）のことを
ちゃんと看取ってあげてほしい／あげるわ

愛 先に死ぬなんて 親不孝な娘
アイ でも私に託してよ

二人 届かない 想いを

愛からの思いを受け取り、顔を上げ、穏やかな表情のアイ。

愛

「最後にもう一つだけ。私はあなた。だけど、あなたはあなた。だから、あなたはちゃんと、自分のために、生きるんだよ」

アイ

「生きる。私は生きるよ、私のために」

ゆっくりと明かり消えていく。

音楽、M 16 B ベースのオルゴールのようなME。

15 未来のために

○情が一人で暮らす部屋

情 「もう帰ってくれ」

情(46)の声で明かりがつくと逸見(46)と情が口論している。

逸見 「いえ、帰れません。どうか、あなたの記憶と感情のデータを収集させてください」

情 「そんなことをして何になる？ あんた、いったい何者なんだよー？」

逸見 「わたしの名前は、逸見怜。愛さんと不老不死の研究をしていました」

情 「不老不死？ 愛はもうこの世にはいないんだ！ ふざけてるのかー？」

逸見 「いいえ！ 私は、あなたの記憶と感情を未来のアンドロイドの脳に転送したいんです」

情 「……思い出した。あんた、あの時のお医者さんだろう。愛が生まれた時に妻の元にやってきた」

逸見 「……」

情 「(自嘲的に笑って) そうか、やっとわかった。愛は、本当はあんたの娘なんだろう？ だから愛に近づいて！」

逸見 「あなた、なんてバカなことを！」

情 「だって、お前はあの日に！」

逸見 「……もし仮に！ 仮に、あなたの娘じゃなかったとして、それであなたは、なにか変わることがあるんですか！？」

情 「変わらない、何も変わらない。だけど！」

逸見 「愛さんの願いなんです！ 未来であなたと暮らしたいと！」

情 「未来で？ 意味がわからない。そんなことあり得ない。だって、愛は俺が母親を（殺したと思っているのに）」

逸見 「奥様は自殺だったんですよね」

M 16 B、カットアウト

情 「どうしてそれを！？」

逸見 「私たちの研究は、記憶を扱うものです。

研究の過程で、愛さんが忘れていたはずの記憶が、お母様が自殺した日の記憶が、鮮明に蘇ったのです」

「ああ、なんてことを。信じられない。せっかく忘れてたのに。どうして。ずっと隠し続けてきたのに……。母親に捨てられたって愛が思ったらどうするんだ！」

逸見 「（隠していた理由を知り）申し訳ありませんでした」

情 「（歯を食いしばりながら）愛は、妻の自殺を知って、なんて？」

逸見 「あなたと過ごすはずだった失った時間を取り戻したいと」

情 「……（思っていた答えと違い、急に感極まる）」

M 17 イントロ i n

逸見 「今日私は、愛さんとの約束を果たしにきました。あなたがたが再び親子として、幸せに過ごすために」

情 「そんな、(驚いて) 本当に? 本当に未来で、愛と暮らせるって言うんですか?」

逸見 「手を尽くします」

情 「……(考えを巡らせ) 先生」

逸見 「はい」

情 「俺の記憶と感情が未来に必要だっていうなら、もう少しだけ待ってください。娘のために、まだできることが、ある気がするんです」

軽快な音楽に変わり、情、一度立ち去る。

○情の人生が駆け巡る

逸見 「その日から彼は変わった」

情、晴れやかな表情で入ってくる。

M 17 「未来のために」

情 朝日を浴びて深呼吸

逸見 読書に励んでは 知識深め

情 未来では 娘の役に立ちたいと

逸見 人の意見を聞いては

情 たくさんの価値観の違いを知り

逸見 未来では 娘の気持ちわかる父親へと

情、曲が進むにつれて徐々に歳をとっていく。

情 できるかな この俺に
逸見 時には少し弱音を吐きながら

情 できるはず 俺ならば
逸見 また前向きに 歩み続けたのさ

二人 十分に 今を生きて 死ぬために

情 「死をむかえるまでに、長い猶予があつて助かりました。娘が死んでからおよそ三十年。わたしももう八〇です。先生、あの時あなたが来てくれて本当に良かった。何もなかった自分が、ウソのようだ。身につけた知は熟し、私のあたらしい感性となつて、それがまた深い感動と発見をもたらしてくれる」

逸見 「それは未来へのよい手土産になりそうだ。しかし、あなたはまだまだ死にそうにありませんね」

情 「気が付けば、人生二〇〇年代だ。来世で娘と過ごそうと頑張ってきたのに、なかなか娘には会えません。しかしあなたはいつまでもお若い」

逸見 「……情さん。もしかするとあなたは死なずとも愛さんに会えるかもしれません」

情 「……！ 意識のデータ転送、完成したんですか？」

逸見 「いえ」

情 「それじゃあ……？」

逸見

「あなたの脳をアンドロイドの身体に直接接続することができそうなのです」

情

「それってつまり……？」

逸見

「はい。肉体が朽ちても、生きていられる可能性があるということです」

情、スポットの中へ入るように退場。

逸見

あの日自ら望んで

彼は実験の被験者になる

生きて愛に再会できると 笑った

いつかその日が来るまで

彼は待ち続けていた 道の途中で

認知症になった

ひらひら 忘れ落ちる

身に付けた 知識も感情も

でも 彼の決意が変わることなどなかった

忘れ忘れた先に

まっさらな 記憶と心で

もとの衣装に着替えたジョウがゆっくり入場。

逸見

彼は ジョウというアンドロイドとして

もう一度 未来で 目を覚ました

逸見ゆっくりと退場。

アイがあらわれる。見つめ合うアイとジョウ。抱き合う二人。

曲調変化 M18 イン트로in

アイ 「偶然なんかじゃなかった」

ジヨウ 「出会うべくして、出会った」

アイ 「彼女が、未来を託してくれた」

ジヨウ 「生きよう。新しい俺たちの人生を」

M18 「タマシイノリレー」

ジヨウ なんて僕らは生まれて

老いて死ぬことができるのだろう
限りあるこの命の灯火を燃やして

アイ なんのためのシステムで

老いて死ぬことを誰が 望んだのか
わからないことばかり

二人 思い 思いに ゆこう

与えられた 心 身体
時に 傷づく ことも あるだろう

進み 進んで ゆこう

自分だけの 意識 記憶
いつか ひとつに 溶けて ゆく日まで

ジヨウ 「アイ！（抱きつこうとして）」

アイ 「もう、調子に乗らないでよ！ だるい！」

いつものまにかいなくなっているレイ

ジョウ 「そうだ！ レイ！」

アイ 「逸見教授！ レイ！ ねえレイ！……あれ？ つながらない……」

アイはキョトンとした顔。

ジョウはレイに向かって、エアで「ありがとう」と呟く
音楽が盛り上がり、灯りがゆっくりと消えていく。

M 18 終了。

灯りがつくと3人が立っている。

M 19 「アンドロイドノナミダ・リプライズ」 in

ジョウ 瞳から こぼれ落ちる しずくを ヒトはナミダと呼ぶ

レイ このカラダ 熱くほてる ココロも痛い

アイ 誰かを思うことで 芽生える気持ち

すぐ温かいもの

レイ でもみんな この胸の奥に 必ずあるよ

ジョウ・レイ 誰かが（誰かを）守りたいと思ったとき

アイ・レイ 誰かが（誰かを）愛したいと思ったとき

三人 ココロとカラダ 響き合って

三人

生きてる 証 あふれだす

あなたと わたし 響き合って
未知の扉 ひらかれる ただの機械には 流せない
アタタカイナミダ

END